

令和8年度第2回交野市図書館協議会 議事録

1 日時 令和8年9月29日(火)15時～16時30分

2 場所 交野市立青年の家2階 会議室

3 出席者

(1) 木下会長、中嶋副会長、蒲田委員、白川委員、戸田委員、北井委員、島田委員、高嵯委員、西岡委員

(2) 事務局 佐伯次長、原田館長、和田課長代理、益田主任

(3) 傍聴者 1名

4 次第

(1) 開会

(2) 議事

①(仮称) 青年の家図書館整備基本計画策定に係る市民アンケート及びワークショップの結果について

②(仮称) 青年の家図書館整備基本計画骨子素案について

(3) その他

(4) 閉会

5 概要

(1) 開会

・委員1名の退任報告

・「交野市の会議の公開に関する指針」に基づき公開の旨確認

傍聴者 1 名入室

(資料確認)

(委員出席状況確認:

委員 14 名中 9 名の出席にて、交野市立図書館条例第4条第6項により会議成立)

(2) 議事

①(仮称) 青年の家図書館整備基本計画策定に係るアンケート及びワークショップの結果について

(事務局より委託業者「株式会社地域計画研究所(通称:アルパック)」紹介)

(アルパックより説明)

今回の調査では、アンケートとワークショップという少し性格の異なる方法で、市民の声を集めた。

アンケートでは、現在の図書館の利用実態や世帯ごとのニーズ、これからの図書館に期待することをできるだけ幅広く把握することに努めた。一方、ワークショップについては、数字だけでは見えにくい「新しい図書館でどういうふうに過ごしたいのか」という具体的な情景シーンを市民の皆さんに描いていただいた。

アンケートは、合計 1391 件という、非常に多くの回答をいただいた。そのうち、無作為抽出（2000 件）に対する回答は 404 件。またワークショップは、25 名が参加、45 件の「すてきな情景」そしてそれを実現するための空間や運営のアイデアを引き出すことができた。

今日は、この結果から特に重要だと考える点を、5 つの視点から説明させていただきたい。

まず1つ目、既存の図書館利用者は、非常にオーソドックスな「従来のこの図書館機能の充実」を求めているということがアンケートの結果でわかった。

また、「現在、主にどの図書館を利用していますか」という問いに対しては、青年の家図書室が 52.9%と過半数を占めている。つまり、この青年の家図書室には、もうすでに新しい図書館に繋がる利用者層が形成されているということがわかる。

その一方で現在の図書館に対する不満というところを見ると、「滞在してゆっくり本を読んだり、学習できる座席が少ない」「読みたい本が少ない」「蔵書冊数が少ない」といった、座席、蔵書、選書という、図書館の基本機能に関するものが中心となっている。このことから、新しい図書館について、単に「居心地のよい場所」「イベントや交流するような場所」をつくれればいいということではないということがわかった。

まず、本を探せる、読みたい本に出会える、落ち着いて本を読める、調べられるという、図書館本来の機能をしっかり整えることが土台になると考えている。

2つ目、今回の調査で非常に重要な点として、図書館を利用していない人に、なぜ利用しないのかというところを聞いたところ、特に中高生では、「そもそも図書館に用事がない」が 57.1%で、結果として突出していた。また、インターネットやSNSで調べられるというような回答も、42.9%見られた。

つまり、利用していない人というのは、必ずしも今の図書館が悪いから行かないというわけではなく、むしろこの図書館に行くきっかけや行く理由そのものが不足しているというふうに考えらる。このことは、新しい図書館を考える上で、非常に大きなポイントになると捉えている。

既存利用者にとっては、もっと使いやすい図書館にすることが重要ということは先ほど申した通りだが、これまで利用していなかった人にとっては、本を借りるだけではない、行ってみたいと思えるような場所にすることが重要になるということだと思っている。

3つ目、世代によって、求められている過ごし方が少し異なるという点。

例えば、一般向けアンケートでは、30 から 40 代では「子連れでも気兼ねなく過ごせる場所」、また、10 代から 20 代では「Wi-Fiや電源があって集中して仕事や勉強ができる場所」、50 代から 70 代以上では「買い物や散歩の途中にふらっと立ち寄るような場所」といったニーズが読み取れる。

また、子どもたちの回答を見ると、小学生では「寝転がったり、クッションに座ってリラックスできる場所」が 77.4%、「カフェがあって、ジュースやお菓子が食べられる場所」が 73.6%。中高生では「カフェや飲食ができるスペース」が 63.6%。そして新しい図書館に期待する姿として、「学校でも家でもない、友達と気軽に集まって緩く過ごせるサードプレイス」が 63.6%となっている。

このことから、すべての世代に同じような図書館の使い方を求めるのではなく、それぞれが自分なりの理由で訪れることができる環境が必要なのではないかと考える。

そして4つ目、図書館そのものだけではなく、地域の中に日常的に過ごせる場所が不足しているということも明らかになった。

アンケートの結果では、60 代 70 代以上で「自宅や職場学校以外に、ちょっと一息つきたい時や自分の時間を過ごしたい時に行く場所」が「特にない」という回答が 4 割を超えている。また、中高生についても交野市全体に対する印象として、「同世代が遊べるような集まれるような場所が少ない」という回答も 30.9%あった。つまり、世代は違っても「家でも学校でも職場でもないもう 1 つの場所」を必要としている人が一定数いるということがわかる。

この点が、今回のアンケート結果と、これから説明するワークショップの結果をつなぐ重要なポイントになると考えている。

ここからはワークショップについて説明する。

8月22日にここ青年の家で開催したワークショップでは、参加者に人と時間のカードを組み合わせてもらい、誰がいつ、この青年の家を利用するのかを想像して、そこから、新しい図書館で素敵な情景を考えてもらった。

例えば、「小学生」×「昼」というお題であれば、「集合場所」であったり、「ベビーカーを押す人」×「曇りの日」の組み合わせであれば、「ベビーカーを押して入れる場所」。また「起業家」×「昼休み」の組み合わせだと「ビジネスに打ち込める専門書」、また「芸術家」×「シルバーウィーク」だと「発表会・展示会」といったような具合になっている。

そして、その条件をこの場所で実現するためには、どのような空間や運営上の工夫が必要なのかまで話し合ってもらい、出てきた 45 件の情景を整理していくと、実は共通する傾向が幾つか見られた。それは、「誰かと交流したい」というよりも「誰かがいる場所で、自分の時間を過ごしたい」というようなニーズが強いということ。

例えば、「新聞を読みながら過ごす」「コーヒーを飲みながら本を読む」「専門書に没頭する」「子どもが友達と集まる」と言ったような情景は、「交流を強制されているわけではないが、完全に1人きりでもない」「人の気配は感じるが、自分の過ごし方は自分で選べる」といったような、緩やかな距離感、これが共通して求められていると考えられる。

また、出てきた45件の情景の中で参加者に人気投票をしていただいた結果、「小中学生の集合場所」というのが45件中11票で最多となった他、「ベビーカー利用者」の情景も7票を集めた。

これは、子どもや子育て世代の居場所、そして、障害の有無や国籍などにもかかわらず、誰もが自然に利用できる環境への期待も非常に強くあらわれた結果ではないかと考える。

これまでの結果をアンケートとワークショップで重ね合わせたものが、資料Ⅰの p3 となる。今回我々は、この結果を「人と本や情報」「人と人」「人と施設」という3つの距離として整理した。

「①人と本の情報の距離」として、既存利用者からは蔵書や座席など、図書館の基本機能への要望が強く出ていることから、まずは「本や情報に近づきやすい図書館」ということが基本になると考える。

一方で「②人と人との距離」については、交流を強制されない緩やかな繋がりが求められている。特に中高生からは、「サードプレイス」として図書館への期待が強く、ワークショップでも「小中学生の集合場所」が最多になっていた。

そして「③人と施設の距離」として、障害があるから、子ども連れだからといった立場や属性によって利用の仕方が分かれるのではなく、誰もが自然に新しい図書館に入って当たり前前に過ごせるような場所が求められていると感じたところである。

以上を踏まえて資料Ⅰの最後に今回の市民ニーズを4つの整備要件として整理した。

1つ目が「蔵書・座席選書等の基本機能の充実」、2つ目が「目的がなくても滞在できる場の整備」、3つ目が「誰もが日常的に利用できる環境の整備」、そして4つ目が「静けさや賑わい、個の時間、交流などを利用者が過ごし方に応じて選べる空間構成」である。

今回の調査から見てきたのは、単に図書館にこういう部屋が欲しいというような機能のリストではなく、「図書館と自分との距離をどう感じられるか」「他の人との距離をどう取れるか」という空間の使い方や居心地に関するニーズが非常に大きかったというふうに考えている。

最後に今回の調査結果を一言でまとめると、本を中心とした図書館としての基本機能をしっかりと持ちながら、その周りにそれぞれの人が自分に合った過ごし方を選べるような余白を作っていくということになるのではないかと考えている。

図書館を利用する人だけの施設ではなく、「今日は本を借りに来た」「少し仕事をしに来

た」「子どもと一緒に来た」「友達と待ち合わせをした」「特に目的はないけれど、少しここで過ごしたい」…そうした様々な利用が自然に重なり合う場所にしていけることが大事なのではないかと感じたところである。

今回のアンケートとワークショップでいただいた意見は、こうした新しい図書館のあり方を考える上で、非常に重要な基礎資料として、今後進めていき、基本計画にぜひ反映していきたいと考える。

質疑応答

会 長) ただいまアルパックよりアンケートとワークショップの結果と、その分析についてご説明いただいた。今の説明について、質問や意見等があれば。

ワークショップ、アンケートをどちらの部分からでもお願いしたい。

委 員) ワークショップを見学したが、参加者は幅広い年代で構成され、性別のバランスもよかった。最初は、初対面の人ばかりで緊張が見受けられたが、アルパックがうまく進行され、最後の方は一体感のある形で終了したという印象。

会 長) 事務局に質問だが、日常的に市内のいずれかの図書館を利用している人、ヘビーユーザーが多かったのか。

事務局) 青年の家図書室利用者も他施設を利用されている方もバランスよく来ていただいていたと思う。

委 員) 前回協議会でも言ったが、星田会館図書室の利用が伸びているのは、読書スペースが充実していること、子どもや親子連れの方と一般の方が分離されているということ、オープンスペース的な読書空間があるというところで、倉治図書館より利用者数が多いと考えられる。今回のアンケート結果からもそのことが見えたように思う。

会 長) 開室して何年も経ち、駅から近いということでもないが、利用が増えている。委員の言うように、児童書コーナーと一般書が完全に分かれているので過ごしやすいのかもしれない。

副会長) アンケートやワークショップの結果を見て、既存の利用者さんが、座席数や蔵書数が少ないと言いながらも利用してくださっているのは、本に対する力と、図書館の雰囲気、職員の方々のサービスにほかならないと思う。新しい図書館がどのような形になっても、既存の利用者も新しい人も使ってもらえるようにしてほしい。また、中高生のアンケートで、「交野市は自然豊かで落ち着いて静かで、治安が良くて生活しやすい」と半数の人が感じている。交野に対して良い思いを持ってもらっている。そういう人たちが交野で育ち、親になった時にまた「良いところだ」と思ってもらえる。そうやって繋がっていくような気がして、興味深く読ませてもらった。

会 長）今回のアンケート、ワークショップは青年の家図書館整備基本計画を構築するためのものだが、それにとどまらず、新しい図書館ができてからも、アンケート結果を web で公開して、長期的な今後の運営の材料とするべき。「こういう要望があったからこういうサービスを展開している」というような図書館と市民双方向での長期的な改善案にも繋がればよいと思う。

数年前に開館した石川県立図書館が開館前アンケートを丁寧に行い、現在も公開している。多様な座席が欲しいという要望から「百脚繚乱」として、様々なデザインの椅子を取り入れたという事例がある。要望がサービスに繋がったことを市民に知ってもらうのは大事なことだと思うので、今後も長期的に活用するということを検討いただきたい。

委 員）私もワークショップに参加させてもらった。私は倉治図書館のヘビーユーザーで、他の図書館はわざわざ足を運ばないが、他の図書館も巡るようなスタンプラリーをしたら、また違いが見えて面白いのかなと思う。

会 長）新しい図書館できた際にスタンプラリーをするのもよいと思う。泉大津市の図書館が呼びかけて、羽曳野市や他の図書館にも広がった「旅する図書印帖」というイベントがある。行くたびにそこのオリジナルなスタンプを押してもらうイベント。仕事が増えてしまっただ大変だと思うが、別の館にも行く機会になる。

委 員）私はたまたま山の方に住んでいるので、子どもたちと車で倉治図書館や青年の家に行っていたが、子どもたちが大きくなってきた時に、学習室が遠くて利用できなかった。新しい図書館が小中学生の、サードプレイスになるのであれば、また中高生が戻ってくる気がしている。中高生（の居場所？）は大事だと思う。

会 長）東京の武蔵野プレイスの地下には、19歳以下しか入れないという、YA（中高生）向けのスペースがあり、非常ににぎわっている。門真市にできたカドマドも学習室がほとんど埋まっていた。

今も青年の家に自習スペースはあるが、新しい図書館では、「サードプレイス」「居場所」機能が充実されることを皆が期待しているので、実現していただきたい。

委 員）市内で居場所が不足しているというところは、子ども・子育ての施策との関係というところもあるかと思う。

図書館の多機能化ということで、様々な機能が確保されて、本来の図書館に求められる機能に繋がるのはよいと思う。ただ、単なる「居場所」でよいのか、「多機能」というところのどこまでを、本来の図書館機能との関係の中で考えていくのかというところは、担当職務の観点から思ったところではある。

委 員）私は、高齢者の立場で読ませてもらった。高齢者の方も居場所がない、行くところがないというのが、課題になっている。体操、囲碁など新しいこと・場所に溶け込めないという

課題がある中で、図書館は、自分で行くことができ、あまり目立たずに過ごせることもあり、高齢者の方には、行きやすい場所になるのかと思う。我々もそういった場所があるということを周知していきたいし、高齢者だけではなく、子どもも障害のある方も誰もが使えるようになっていけばよいと思う。

委員) 私はもともと小学校教員で、30 年ほど交野市で教員をしている。副会長がおっしゃったように、交野の子は本当に交野が大好きで、私の教え子も親になって交野に帰ってきて、その子どもが入学してきて再会することもある。

また、先ほどこのワークショップの中に、「パパ」×「学校が休みの日」で「洞穴みたいな空間」と書いてあったが、星田会館図書室に行くと、そういった空間があって、子どもたちはそこが大好きで、狭いところに何人も入り込んでいる。

昔のイメージで、どうしても図書館というと「読書」「情報」「学習」のようなことだけにとらえてしまうが、今の魅力的な「居場所」は、いろんなことが複合された場所なのだなと感じている。

「中之島こども本の森」に行ったが、大人でも楽しくてわくわくするスペースだった。これから計画を立てていく中で、いろいろなところの良い部分を取り入れながら、交野としてのしっかりしたものを持った図書館ができるといいなと期待している。

会長) アルパックさん、皆さんからの意見を受けて、いかがか。

アルパック) 先日のワークショップの参加者やアンケート結果を見ていて感じたのだが、交野の図書館はとても利用者に愛されていると思う。皆さん誇りに思っていて、本好き、図書館好きの人が非常に多いなど。

それゆえに新しい図書館を作るにあたっては、現状の図書館の不足している部分を補足していくという視点をまず大事に、従来の図書館をきちんと作ることが大切だろうと感じている。

ただやはり、図書館に來られていない方も一定数いる中で、せっかく作るのであれば、いろいろな人に來てもらって楽しめるような場所にする 것도大事だと思うので、「図書館機能を充実しつつ、図書館にあまり興味がなかった人にもきちんと來てもらえるような楽しい図書館にする」これを基本に計画を作っていきたいと感じている。

②(仮称)青年の家図書館整備基本計画骨子素案について

(事務局より説明)

第1章 計画の背景と目的

1 計画策定の背景と目的 について

■計画策定の背景

前回の協議会で説明があったように、既存施設の改修・修繕という市の方針がある。このことから、現在の青年の家Ⅰ階部分を図書館フロアにするという計画が打ち出された。

■計画の目的

単なる改修ではなく、図書館を「知の拠点」として整備すること、その拠点から持続可能なまちづくりへつなぐことである。そのために、基本理念や施設機能、空間構成、事業費等を総合的に整理し、実現的な計画策定を目指したい。

2 上位計画及び関連計画との整合 について

本市の 8 つの計画との整合性を図り、策定を進めていく。

3 社会情勢の変化と図書館を取り巻く全国的な動向 について

近年の図書館整備では、資料・情報提供を基盤としながら、次のような方向性も重視されている。

- ・「貸出の場」から滞在し、学び、活動できる場へ
- ・複合化から「機能融合」へ
- ・誰も取り残さない利用環境の整備
- ・DX・ICTによる「省力化」と「サービスの質向上」の両立
- ・建物単体ではなく、地域全体を図書館サービス網としてとらえる視点

また、多くの自治体が抱える公共施設の老朽化について、本市においても既存ストックをいかに有効活用するかという課題がある。

4 先進事例の整理として、他市町村の同様の事例の視察などを行い、積極的に庁内外で情報共有及び収集を行い、有益な情報を計画策定に生かしたいと考えている。

第 2 章 交野市立図書館の現状と課題

1 交野市の地域特性と図書館の現状 について

■交野市の地域特性

人口は約 7 万 7000 人に対し、65 歳以上の高齢化率が 28.3%。一方で、交通の利便性や良好な住環境により、市外からの子育て世代の流入がある。生涯学習やボランティア活動、文化活動に熱心に取り組む市民が多く、多様な市民活動のポテンシャルを有している。

市内に共生する多世代が安全・快適に過ごし、交流・活動できる公共空間へのニーズ、そして、自宅でも職場でも、学校でもない、第 3 の居場所「サードプレイス」が求められていることが、アンケート結果、ワークショップの意見からもうかがえる。

また都市基盤や公共施設の状況としては、市域が比較的コンパクトにまとまっているものの、施設の老朽化が進行しており、既存ストックの有効活用と複合化による再編が、本市のまちづくりの喫緊の課題となっている。

■交野市の図書館の現状

- ・図書館・図書室と自動車文庫による身近なサービス網を構築しており、図書館・図書室を拠点に自動車文庫（ブンブン号）のステーションで、よりきめ細かいネットワークサービスを構築している。
- ・利用状況と貸出を基盤とした多様な利用については、利用者数、貸出冊数が北河内でも多いほうである。一方で登録者数は11%程度と少ないが、これはどの自治体でも同じ傾向である。
- ・学校・こども園・地域へのアウトリーチサービスとして、直接図書館に来られない子どもや、子どもに関わる大人へのサービス、学校支援や巡回車での学級文庫の物流、ブンブン号などが挙げられる。
- ・「利用者との心理的距離の近さ」は、長年培ってきた職員対応によるもので、本市ならではの継承したいサービス文化と捉えている。

2 市民ニーズの把握と分析 について

アンケート調査及びワークショップに基づく潜在ニーズを抽出し、以下のように分析し、計画に反映させる。

- ・利用実態と世代別のニーズ
- ・関係性と居心地への期待
- ・新図書館の整備の期待

アンケート調査の結果は、先ほど報告にあったとおりである。回答率、自由意見から、図書館への興味関心が高いと捉えている。

また、ワークショップは、8月22日の暑い日に、25名の参加があった。保育をつけたことで、6世帯8名の預かりがあり、子育て世代の声も取り入れられた。

市民アンケートとワークショップから、新図書館に期待する声も多く、この結果をもって、できること・できないことを精査し期待にこたえていきたい。委員の中にもご協力いただいた方々がおり、感謝する。

3 現図書館・図書室における課題の整理 について

現状の課題とあわせて、新図書館における計画条件として以下の点が挙げられる。

- ・誰もが使いやすい空間への改善
- ・静けさとにぎわいを選べるゾーニング
- ・広くなるからこそ必要となる「見守れる空間」と安全管理
- ・バックヤード・物流・職場環境をサービス品質の基盤として整える
- ・施設拡大とサービス拡充に見合う人員・運営体制
- ・ICTは「人が人に向き合う時間をふやすために」
- ・交野らしさを継承しながら、新しいサービスを育てる

4 青年の家の現況と制約条件 について

施設の法令、構造、空間、設備の各側面から制約条件を整理する。

- ・施設概要の整理としては、建築面積、延べ床面積、構造、階数、平面図等、ハード面の基本情報を整理する。
- ・法的制約条件の整理としては、建築基準法、消防法、バリアフリー関連法、条例への適合等を整理する。
- ・構造的制約と空間的課題の整理としては、耐震壁等の空間利用に関する課題の把握、並びに、床積載荷重等の検証を行う。
- ・設備・インフラの適合性と改修課題の整理としては、電気容量の確認、空調換気システムの検証、給排水設備等の把握を行う。

第3章 新図書館の基本理念と基本方針

1 基本理念 について

「本と人、知と活動をつなぎ、交野の日常を豊かにする図書館（仮）」

新図書館は、図書館の基本機能である、本と情報を確実に届ける図書館本来の役割を土台としながら、市民それぞれが「読む、調べる、学ぶ、くつろぐ、出会う、活動する」といった多様な利用ができる場にする。市民の関心や問いが資料や情報と結びつき、学びが活動へ、活動が新たな問いや学びへと循環していく「場」であることを目指す。そうした「交流・循環」をとおして、図書館がそれぞれの可能性を広げる「場」であることを基本理念と考えている。

2 新図書館の基本方針 について

以下の6点を基本方針とした図書館づくりを進めていく。

- ①本・情報へのアクセスをすべてのサービスの土台にする
- ②静かに過ごすことも学び合い活動することも選べる居場所をつくる
- ③図書館と生涯学習等の、知と活動が循環するように融合する
- ④誰もが使いやすく、支援を必要とする人に情報やサービスが届く図書館にする
- ⑤ICTを活用しながら、人と人との関係を大切にする
- ⑥市民と職員が、開館後も育て続けられる図書館にする

3 市内図書館ネットワークと機能分担 について

市内全域をつなぐ図書館ネットワークの構築、倉治図書館との機能・役割分担の明確化、各図書室・自動車文庫の身近さを生かしたサービスの充実、将来の全般的な管理運営方針への展開をめざす。

第4章 導入機能とサービス計画

1 生涯学習機能との融合 として

第3章の2基本方針にもあるように、図書館の「知・情報」と生涯学習の「学習する・創造する・活動する」が、相互に循環するようなサービス設計を行う。

2 誰もが心地よく過ごせるサービス展開 として

誰もが自分に合った過ごし方を選べる図書館をめざし、異なる年齢、身体状況、目的、感覚特性などを持つ人の選択肢を重視する。このことから、バリアフリー化、閲覧・自習席の充実、児童スペースの改善が求められる。

環境としては、案内やサイン、車椅子・ベビーカーでも移動しやすい通路、取り出しやすい書棚、休憩できる座席、静かな読書席、自習席、中高生や若年層が求める「集中して作業できる場所」の充実、電源やWi-Fi環境の整備が必要と考える。

空間としては、親子で過ごす場所、交流・グループ利用が気兼ねなくできる時間・空間と、静かな利用を希望する人の環境の両立が必要である。利用者のプライバシーに配慮した、相談しやすいカウンターの確保も求められている。

資料とサービスとしては、多様な利用者へのサービス拡充、大活字本や展示資料・デジタル図書・多言語資料などの充実を目指すとともに、中高生や若年層が求める集中して作業できる場所の充実とヤングアダルトサービスの検討を行う。

3 DX・ICT環境の整備と拡張としては、以下の5点が挙げられる。

- ・館内利用環境として、Wi-Fi、十分な電源、館内OPAC（タッチパネル式の検索機）などについて、学習や調査、滞在を支える基盤としての環境整備を行う。
- ・貸出・返却・資料管理として、ICタグ、自動貸出機、自動返却機、予約本受け取りブースなどについて、導入費、維持費、業務削減効果、セキュリティの比較などを検討する。他市事例が多く、ワークショップでも導入希望の意見があった。
- ・オンラインサービスとして、電子書籍、Web 予約、情報発信、デジタルアーカイブなど来館サービスを補完する「もう1つの図書館の入口」として、拡充検討を行う。アンケート結果による非来館者の要望として、これらが取り上げられている。
- ・デジタル利用の選択肢の保障として、セルフ機器やオンライン手続きの利用を希望しない人や、利用が難しい人への操作支援を行う。
- ・職員の業務支援として、新技術の活用可能性を検討する。

第5章 施設計画

1 施設規模と必要諸室の設定 として

将来的な人口動態や市民ニーズを見据え、新図書館に求められる目標蔵書数や、閲覧席数を設定する。あわせて、開架、児童、学習、滞在、多目的スペースなど、各機能に必要な面積規模を算定し、限られた空間を最大限に活用する施設計画を策定する。

2 ゾーニング・動線計画 として

既存のRC構造壁を生かした多様な滞在空間を創出し、誰もが気兼ねなく利用できるユニバーサルな動線計画を考える。既存施設のRC（鉄筋コンクリート）構造壁といった物理的な制約を逆手にとり、静かに読書や学習に集中できるエリアと、親子で過ごしたり、交流したりできるにぎわいのあるエリアを自然に分離し、それぞれの利用者が快適に過ごせるゾーニングを行う。

3 複合化を促す空間構成 として

図書館と生涯学習、市民活動が繋がる開放的で回遊性の高い空間を整備する。1階フロア全体を一体的に運用できるオープンな空間構成、エレベーターや階段などの垂直動線をわかりやすく整備し、施設全体の回遊性を高める。

4 屋外空間の活用として、読書イベントなど、屋内と屋外が連続し、自然を感じられる空間として、青年の家の敷地全体の活用を検討する。図書館の機能拡張の場として積極的に活用したいと考えている。

5 働きやすいバックヤード環境の構築として、サービスの基盤となるバックヤードの環境整備、物流・資料の搬出入や装備修理といった作業が行える独立スペース、休憩室の確保、働きやすい職場環境の構築をめざす。

第6章 管理運営方針

運営の基本原則、人員体制と役割分担、複合施設としての運営分担、安全・防犯・見守り、開館準備と人材育成、工事期間・移転・開館準備期のサービス継続、評価と改善など管理運営方針について、一体的に整理する。

第7章 事業実施に向けた計画

新図書館の実現に向け、事業費、スケジュール、今後の課題を整理し、設計改修から開館後の運営までを見据えた事業化の道筋を示す。

- ・概算事業費の算定として、建築・設備改修工事費、什器・備品購入費、ICT導入費、移転費、開館準備費など、総事業費の整理を行う。
- ・事業スケジュール（ロードマップ）としては、設計、改修工事、行政手続き、蔵書什器計画、ICT調達、資料移転、職員研修、運用ルール作成、広報などの運用テスト期間を経て、開館準備を工程として明示する。
- ・事業化に向けた今後の課題・取組として、青年の家全体の機能分担と運営主体、新図書館と倉治図書館等との機能分担、必要人員と専門職体制、ICT図書館システム更新との整合、工事中のサービス継続、開館後の維持管理費・運営費、市民・職員の継続的な参加と情報共有等について整理し、設計・開館準備段階へ引き継ぐものとする。

質疑応答

会 長）ただいまの説明について、これは骨子素案であり、次の段階で骨子案になる。骨子案作成に向けて、質問や意見をいただきたい。

委 員）感想でもよいか。新図書館の基本方針での「ともに育てる」というのがあり、これはヘビーユーザーとしてもとても嬉しい。

また、最近の図書館は愛称がついていることが多く、門真はKADOMADO、私が大好きな栃木県黒磯にある図書館（那須塩原市図書館）は「みるる」という名前がついている。そういうかわいい名前がついたらいいと思う。ぜひ公募してほしい。

会 長）茨木の「おにクル」も市民公募で、小学生の男の子の意見が通ったそう。

「ともに育てる」という表現が、開館前に様々な意見をいただくだけでなく、開館してからもずっと市民に関わってもらおうということを表している。これは図書館としては、目指してもらいたい。

委 員）率直に個人的に空間のイメージということを考えるとこの基本理念はすごく硬いと感じる。何かもう少し、先ほど言われていたワクワク感というのが、この理念に反映できたらもっとよいのではないかと思う。

会 長）「本と人、知と活動をつなぎ、交野の日常を豊かにする図書館」という基本理念は、（仮）なので、具体的に案があれば、「わくわく」という言葉を入れるとか。

委 員）かみ砕いてもよいかと思う。例えば「人」という言い方を「みんな」、「知と活動」を「学ぶ」とか「楽しむ」という言い方で表現を変えていくとか。「日常を豊かにする図書館」というのも、より「わくわく」するようなイメージができる表現にするとか。この案の説明をコンパクトにまとめるとこのとおりだとは思いますが、もう少し遊び心あってもよいのではないかと思う。

会 長）札幌市図書・情報館は、「はたらくをらくにする」をコンセプトに、狭い概念のビジネス支援にとらわれず、様々な職業のビジネスパーソン「働く」が「楽」になるように、様々なアート作品やブックコーナーがあったりする。キャッチコピーではないが、イメージ戦略。

泉大津市立図書館は「〇〇してはいけない」をできるだけ言わない（なるべくノーと言わない）を運営コンセプトにしている。

この基本理念は大事。一度決めたらそれがずっと続いていくので難しいが、皆さん、いかがか。

委 員）私もこの意見に賛成で、基本理念だからこそ、もっと大きくやわらかいものがよいと思う。基本方針であれば、きっちりしたものが必要だと思うが、理念はもっとみんなが思い描けるようなものにしたらどうか。逆に理念だからこそ遊べるのではと思うので、やわら

かく、それこそわくわくできるようなものになるとよいと思う。

会 長）今の意見のように、第 3 章の 2 の基本方針のところで、実際に実施していくことを具体的に盛り込むので、基本理念はもう少し、大きな概念で「わくわく」や「ふわっ」といった感じでいかがか。今ここで「これにしよう」というものを出せるわけではないが、基本理念については、もう少しイメージ戦略になるようなことに変えていただくということではないか。

（異議なし）

委 員）施設のイメージをするために質問だが、体育館の方も含めての改修になるのか。そこは別か。

事務局）体育館の部分は含めずに、約 1000 平米ほどある。体育館から廊下側、廊下を含めたところで、イメージしていただけたらと思う。

委 員）質問として、「倉治図書館との機能・役割分担の明確化」というのは、具体的にどういうことをイメージされているのか。

もう 1 点、意見として、私自身、図書館で長年 DX・ICT の担当をしていた経験から、IC タグは、お金がずっとかかっていく。仮に予算的に問題ないとしても、新館で IC タグを入れるのはそれほど難しくないが、既存館、特に交野市のように分館（室）があるところは、全館（室）に IC タグを入れられないかぎり、効果が出にくい。導入については、そういうところを含めてじっくり考えたほうがよい。

また、IC タグ導入の検討の際に必ず出てくるのが自動貸出機だが、これも職員が付きっきりで案内しない限り利用されないと聞く。

そういうところも踏まえて、IC タグを入れるなら、ベンダー（業者）から「これでしかできない」という業務の提案をもらって、それをできれば効果はあると思うが、「貸出が早くなる」「人手が不要になる」といった今の業務の効率化としては、あまり費用に見合う形にはなりにくいと思う。

会 長）2 点目の方は今後、図書館の方で検討を。1 点目の倉治図書館との役割・機能分担の方について、事務局から。

事務局）倉治図書館が担ってきた資料保存・自動車文庫の基地局といった機能や地域資料の収集・新刊の発注受入といった全館を支える中央館的役割と、新図書館が強化する滞在・学習・交流・生涯学習連携等を整理し、相互に補完し合いながら市全体の需要を満たすことができるような役割分担を検討する。

「公共施設等再配置計画」の中で青年の家図書室を「核となる図書館として配置する」とされているが、「核となる」＝「中央館」ということではなく、「コミュニティ拠点としての核」「知と活動＝生涯学習拠点としての核」といった、様々な捉え方で、求められる

役割・必要な機能の検討を続けたい。

倉治図書館・新図書館「双方がそれぞれの地域に根付いた地域館」として、相互に補い合い、残る2室と自動車文庫も含めた「交野市立図書館」としてのネットワークを構築したいと考える。

委員) 広くなり、図書館蔵書も増える。職員を増やさないと大変だと思う。これは市の予算に関わらず、ICタグよりもそちらが優先ではないか。職員の給料も上げるべき。現時点で、職員体制のことで検討していることは？

事務局) 職員体制に関しては、長年、図書館司書職員の採用がなかった。現在、今後の増員に向けて検討を進めている。

副会長) 併せて、学校図書館の人の配置・充実と、図書館と学校図書館のネットワークの構築をお願いしたい。

委員) 学校の現状については、学校司書が常勤でいる学校と、週2回しか派遣できてない学校があり、そこは教育委員会としても一定課題だと認識している。これまでも要求はしており、今後も継続していきたいと考えている。

良い図書館ができて、そこと連携して、教育もさらに向上していくことを目指していければと考える。

会長) いつでも人(司書)がいる学校図書館という要望。ぜひお願いしたい。

本日いただいた意見については、計画骨子として、事務局で整理した上で、今後の計画素案の作成に反映してもらうことでよろしいか。

(異議なし)

では、本日予定していた議事案件は以上となる。

次に、次第3 その他について、事務局から。

事務局) 第3回協議会は12月4日(金)15時から開催したいと考えている。

次回は、(仮称)青年の家図書館整備基本計画素案について審議いただくので、出席をお願いしたい。

会長) 次回は基本計画の素案が示されるので、よろしくお願いしたい。

本日の協議会全体を通して、何か確認等はないか。なければ、以上をもって、令和8年度第2回交野市図書館協議会を終了する。